

集積回路技術者育成

TDCとマッチングラボ

有明高専が産学連携で

大牟田市東萩尾町の有明工業高等専門学校（八木雅夫校長）の産学連携の取り組み「マッチングラボ」の第7号として、「TDC（トッパン・テクノカル・デザインセンター）半導体・集積回路デザインラボ」が1日付で設立された。12日には同校総合研究棟で、八木校長と同社の小鹿和繁社長によるパネル看板の取り付けが行われ、参加した関係者は未来の集積回路技術者育成を願った。

マッチングラボは校内に専用ラボを設置し、提携した企業、同校の研究者や

学生が協力して2年間の継続した研究を行う取り組み。同社は東京、埼玉、北

海道、京都、福岡に拠点を置く半導体・集積回路設計のエキスパート企業で、同校とは2017年から共同研究などを行っている。



ラボの看板を持つ小鹿社長（左）と八木校長

ラボの研究総括を務める、同校創造工学科情報システムコースの石川洋平准教授の呼び掛けで実現。同社の実践的な設計技術や、集積回路設計の楽しさを伝えることを目的に、①人工知能を用いた回路技術の伝承②実践的なアナログ回路レイアウトとビジネス思考③デジタル技術者教育の3点を実践していく。

世界的な半導体不足によるデジタル機器の供給不安もあり、半導体設計・製造

の国内一元化とその設計技術者の育成の重要性が増している。九州内でも半導体受託生産世界最大手のTSMC（台湾積体電路製造）が熊本県菊陽町に新工場を建設すると発表するなど注目が集まっており、同ラボでは九州から技術教育の土台をつくることを目指して研究・教育を進めていくという。

12日は、八木校長が「地域の課題に対して教員や学生の若い力で貢献していくのが大きな目的」と関係者に説明。小鹿社長は「企業の実践的取り組みと教育を合わせていきたい」と思いを述べ、2人でロビーにパネルを取り付けた。

石川准教授は「実践的な技術の習得はもちろん、まずは生徒に集積回路設計の楽しさを伝えることが大事。設計技術者の道に興味を持つ若者を増やしていきたい

」と話していた。

（益田 明徳）